

「男性史研究なんてものがあるんですね」。1990年代半ば、日本における歴史学とジェンダー研究をリードする人びとから聞こえてきた言葉である。男性性、あるいは男らしさというものを、歴史の変数としてとらえ、男のジェンダーから歴史を読み直すという手法は、今から10年ほど前、日本ではまだ目新しいものであった。一方ドイツでは、1991年にウーテ・フレーフェルトが近代市民社会における決闘文化に着目して男性史研究を発表し、1996年にはトーマス・キューネが論文集『男性史』を編集し²、同年に開催されたミュンヘンの歴史家大会では男性史の部会がはじめて設けられるなど、男性史研究という新たな分野の誕生に、期待高まる気運がただよっていた。当時、ドイツに留学していた評者にとって、それゆえに一時帰国して耳に入ってきた日本のジェンダー研究者の言葉は印象に残った。たしかに日本では、男性学の意義が説かれ始めていたものの、歴史研究の実践はごくわずかで、いまだ五里霧中といった状況だった。慧眼をもってキューネの編著を見出したドイツ史の星乃治彦氏が、1997年に『男性史』を翻訳、紹介したことで、その霧の中に光が灯され、日本における男性史研究に重要な道標が建てられた。

本書の翻訳も、いまだ見通しが晴れやかとはいえない日本の男性史研究の中で、大きな期待と希望を感じさせる。筆者ジョージ・モッセについては、本書以外に五冊が邦訳されており、改めて紹介するまでもないかもしれない。「大衆の国民化」、「市民的価値観／リスクタビリティ」などを歴史研究のキー概念として打ち出し、ドイツ・ユダヤ史を原点として政治文化論、市民社会論、人種主義論など、1999年に亡くなるまで数多くの著作や論文を発表した。没後も彼の影響力は衰えず、

2000年にはジョージ・モッセ賞が創設され、ヨーロッパの知と文化の歴史に携わる研究者にエールを送り続けている。そのような世界的な権威をもつ歴史家が晩年手がけたのが、男性史研究であった。本書のオリジナルは1996年に発表され、翌年にはS.フィッシャー出版社からドイツ語の翻訳が出されている³。日本語の翻訳に関心が高まるのも当然であろう。

*

本書を理解するには、まず、「男らしさのステレオタイプ」という概念をおさえておかなければならない。モッセが「ステレオタイプ」という語を用いて喚起しているのは、人間を個人というよりはむしろ男とか女といった類型でとらえ、その集団の特性を有し、規格化された心象を示すものとする、いわば認識の仕方である。彼がいうには、「男らしさのステレオタイプ」は、個人を均質化し、個人の自由を制限する一方、Bildung（自己陶冶）の目的、生きるための指針となり、男性たちの心の内面にまで深く浸透していった。

モッセは、分類の科学がさかんになり、新しい市民層が勃興した18世紀後半から19世紀前半にかけて、男らしさのステレオタイプがはじめて形成されたと考える。もちろん、近代における男らしさが、前近代とまったく断絶した関係にあったわけではない。中世の騎士道精神、貴族が重視した名誉、カルヴァン派や敬虔主義にみられた、感情を制御し、中庸を尊ぶ精神は、近代的な男性性の構成要素であった。しかし、こうした男性の「美德」は18世紀後半から組織化され、加えて、人びとの視覚に訴え、外見からも理解されるべきだと考えられるようになった。「今やかつてないほど身体的な外見の重要性が当然視されるようになった」。(p.30)

モッセは、人相学が近代の男らしさの構築に重要であったという。実際、ラファーターは、「身体的な美と道徳的な美の調和」を賛美する者であった。「仕事、調和、清潔への愛」が身体的な健康と引き締まった四肢をもたらすという理解は、たしかに近代の男性像を素描している。他方、古代ギリシアの美の基準を18世紀に呼び起こしたヴィンケルマンもまた、「男らしい美の基準設定」に大きな役割を果たした。男性の身体美、とくに裸体美について語ったヴィンケルマンがなぜ広く受容されたのか、モッセの説明には説得力がある。18世紀後半、「新しい時代」の到来が予感され、新しい価値観が生み出される中、古代ギリシアの男性美が「急激に変化する世界における不動の基盤でもあった」。(p.55) 19世紀に入っても、ヴィンケルマンに批判的であったシラーですら、彼の美意識がナポレオン戦争、革命、社会変化の時代に安定の感覚をもたらすことに貢献したと認めたという。

ヴィンケルマンが重要なのは、人びとの男性美への感覚を研ぎ澄ませただけでなく、それに到達するための身体鍛錬の必要を説いたためである。これは、18世紀末に青少年のための体操教育について著したグーツムーツを経て、ナポレオン戦争期のヤーンの体操論へと受け継がれた。鍛えられた身体は、ドイツ愛国主義と不即不離の関係で論じられるようになる。この時点で、男らしさのステレオタイプは、ナショナリズムという強固なイデオロギーと合流し、一つの完成形をなした。ギムナジウムや大学における教育、軍人協会などの社交組織、そして家庭生活など、さまざまな社会の次元で、男らしさのステレオタイプは制度化され、組織化されていった。

*

しかし、男性のステレオタイプは、自己完結した確固たるものでなく、それと対極をなすもの、すなわちカウンタータイプ（対抗的タイプ）を必要とし、またそれを形成するこ

とによって、自らを規定し、強化していった。他者形成による自己規定というメカニズムは、近代の男らしさにおいても同じである。

モッセが男らしさの規定と強化に作用したカウンタータイプとして挙げるのは、おもに二つある。一つは、ユダヤ人、ジプシーや浮浪者、さらに性的異常者、犯罪常習者、精神異常者などである。道徳を重んじ、身体的にも精神的にも健全で、快適な住居を構えて都市の生活を送る市民層に対し、定住せず「根無し草」のような存在、身体的、精神的に「異常」をきたし、あるいは「障害」をもつとされた社会のアウトサイダーたちである。もう一つは、いわずと知れた女性である。近代における性の二元化の中で、理想的な男らしさとは常に女らしさと対極に語られた。

模範的な男性像の輪郭を明確にするために、これらのカウンタータイプには否定的な特性が与えられ、差別の構造が生み出された。ユダヤ人男性は、か弱い身体をもった女々しい存在、その一方で、自らの性欲を制御できず、性的に放埒な存在、といった調子であった。しかし、このように二級市民的扱いをされたカウンタータイプが、彼らの状況に甘んじていたわけではなかった。19世紀末、彼らは、男らしさのステレオタイプを脅かす存在となった。とくにユダヤ人や同性愛者たちは、ステレオタイプとの線引きが曖昧であるがゆえに脅威であった。国家を超えた国家の建設を訴えるシオニズム運動、社会においてますます可視化されていた同性愛者たちの存在、さらに男性と同等の権利を主張する女性解放運動。「世紀末のデカダンス」とは、男らしさのステレオタイプが揺さぶられた時代であった。

第一次世界大戦は、力強いドイツ人戦士像を大いに称揚したが、この戦争が敗北に終わると、男らしさの危機は、むしろ深刻化していった。女らしさも母性も否定する「新しい女」が、短髪、男装、くわえタバコで町を闊歩し、同性愛者たちは自由を謳歌し、彼らが

集まり踊る場は、大都市の一風景となった。この時期には、社会主義者たちの「新しい男」像も注目された。オーストリアの社会主義者マックス・アドラーは、男性の優越性を否定し、両性の平等を説き、ともに未来の社会主義社会の建設に貢献しようと訴えた。ボルシェヴィキの男性も、男女の形式的平等を認め、女性を同志ととらえ、伝統的なステレオタイプから離脱しようとした。

だが、男らしさのステレオタイプは不屈であった。大衆は、1920年代の社会現象に眉をひそめ、「正常な」ジェンダー秩序の道への回帰を訴えるナチズムを選んだ。「もっと男らしい男、もっと女らしい女」とは、ナチズムのジェンダー規範である⁴。ユダヤ人迫害、(男性)同性愛者の取り締まり、「産む性」の強化は、それぞれ無関係な政策ではなく、男性史の観点から見れば、その根底でひとつところに繋がっていた。模範的なドイツ人男性のステレオタイプは、ファシズムにおいて、人種主義という野蛮な方法を用いながら、脈々と固守されたのであった。

＊

本書を読み進めていくと、モッセがなぜ男性史研究に取り組んだのかがおのずとわかってくる。彼は、『ナショナリズムとセクシュアリティ』で「市民的価値観／リスペクタビリティ」という概念を生み出し、社会の模範となり、立派な、尊敬されるべき道徳を体現した市民層の価値観を把握することが、近代社会を理解する鍵であると主張した。しかし、市民的価値観とは、ジェンダー・ニュートラルなものでは決してなく、市民の男性性を基盤としていた。この点をより鮮明にしたのが本書であって、したがって、『ナショナリズムとセクシュアリティ』と本書『男のイメージ』は、モッセによる男性史研究の二部作とみなすことができるように思う。本書でモッセは、市民的価値観が保持されている限り、男らしさの理想は守られたと説いている。それは、

ファシズムとて同じであった。アーリア人の外見は、ヴィンケルマンの古代ギリシアモデルに重なり、ファシストたちが賛美する、身体鍛錬によって引き締まった肉体は、男らしい精神の証であった。「ナチズムは、市民的価値観の守り手として立ち現れるあらゆる努力をしていた」。(p.270) 市民的価値観が失われられない限り、男らしさのステレオタイプは有効ということになる。

戦後の社会は、アメリカを発信地として影響力を増す映画やメディア文化、アウトサイダーを賞賛する若者文化、ゲイの解放運動、家父長制打破を目指す女性解放運動などによって、アルターナティブな男らしさが示され、伝統的な男性性は変化を迫られてきた。しかし、その理想像はいまだ存続している。最終章の「新しい男性性に向けて？」の結論は、モッセにとって、あくまで疑問符付きの問いかけのみである。彼は、新しい男性性について何かを提言するのではなく、その問いを開かれたまま読者に示している。代わりに、歴史家として、男性のステレオタイプが、近代社会において最も重要かつ持続可能なシンボルの一つであったことを今一度、確認し、過去をふりかえる意義を説いている。今後、「社会の変革を望む人々はすべて、…近代的な男性性のステレオタイプを考慮に入れなくてはならない」。こうして、モッセの男性史研究は終わっている。1980年代末に北欧ではじまり、ドイツでも2001年に同性カップルの婚姻に準ずる保護が法制化された現在、男性性は、どのように変容していくのだろうか。男らしさのステレオタイプと共にある市民的価値観は終焉を迎えるのだろうか。本書を手を、男のジェンダー研究のさらなる展開が期待される場所である。

翻訳については、多少、生硬な訳文がみられ、「男らしくなさ」といった表現や、プロシア、サキソニー、バイエルンといった英語とドイツ語の混交した表記などが目についた。

本書できわめて残念なのは、モッセが注に挙げている文献の中に、邦訳本が少なからずあるにもかかわらず、ふれられていないことである。ルソーやステファン・ツヴァイク、テオドア・フォンターネの作品はいうまでもなく、リン・ハントの『フランス革命の政治文化』、モナ・オズーフの『革命祭典』、サンダー・ギルマンの『フロイト・人種・ジェンダー』のような研究書レベルの邦訳にも言及す

【注】

¹ Ute Frevert, *Ehrenmänner. Das Duell in der bürgerlichen Gesellschaft*, München 1991. 男性史研究の理論化については以下の論文を参照。Dies., *Männergeschichte oder die Suche nach dem "ersten" Geschlecht*, in: M. Hettling u.a.(Hg.), *Was ist Gesellschaftsgeschichte? Positionen, Themen, Analysen*, München 1991, S.31-43, フレーフェルトの近年の著作でも、男性史研究の手法は中枢をなしている。Dies., *Die kasernierte Nation. Militärdienst und Zivilgesellschaft in Deutschland*, München 2001

² Thomas Kühne (Hg.), *Männergeschichte-Geschlechtergeschichte. Männlichkeit im Wandel der Moderne*, Frankfurt a. M./ N. Y. 1996, 『男の歴

史』星乃治彦訳 柏書房 1997)。
³ George L. Mosse, *Das Bild des Mannes. Zur Konstruktion der modernen Männlichkeit*, übersetzt v. T. Kruse, Frankfurt a.M. 1997.
⁴ この点については、以下の論文も示唆に富む。クロード・クーンズ「「もっと男らしい男、もっと女らしい女」ーナチ人種憎悪のイコノグラフィー」『思想』1999, No.898, pp.104-135.